

〔新刊紹介〕

立命館大学中古文学研究会編

『平安文学研究・衣笠編』について

中西健治

今を去ること半世紀以上も昔、御所近くの本学広小路学舎にあった日本文学研究室から平安文学の研究論考を中心とした雑誌が発行された。その中心にあつた方こそ、枕草子研究にその名をいまなお輝かせている田中重太郎氏であつた。わずか十六頁の小冊子ながら、表紙には清水泰教授の揮号による誌名と扇面屏風画をあしらつた粋な装丁の雑誌でもあつた。第一号には購読申し込みを兼ねた宣伝用紙が挟み込まれていて、その挨拶冒頭には「『しろきものいきつかぬところ』多きままに、ともかくも平安文学研究第一輯を旅立たせました」とある。枕草子の一文を引用しているところ、いかにも枕草子研究に没頭している青年田中氏らしい。かくして「平安文学研究」は世に出た。

以来三十九年、田中重太郎氏の逝去後、

程なくして該誌は七十九・八十輯を以て終刊することになったが、この間、平安文学研究の発展に少なからぬ貢献をしたことは多くの方が等しく認めるところであらう。その後、本学で平安文学の授業を担当されてこられた伴利昭名誉教授が去られ、先生のご稀を祝福する意味をこめて講筵に連なつた方々の論文と資料を中心として一書を編もうという計画が持ち上がった。その中心は野村倫子氏や井上千鶴子氏、高橋照美氏らであつた。とりわけ野村氏は綿密な計画をたて準備に奔走されたが、原稿が集まる頃から勤務の都合で身動きがとれなくなり、伴先生の後任である中西健治がその仕事を受け継いだ。論文が集まり、和泉書院の廣橋研三氏の協力をいただいで出版することになったものの、書名については思案する日々が続いたのである。そんな折、中

古文学会関西支部会を本学で開くことがあつた。懇親会の席上、片桐洋一氏から「いつか『平安文学研究』を顕彰する機会をもつては如何か」というお話を伺つた。現在の文学部は京都の北隅、衣笠山の麓にある。この場所から田中重太郎氏が長年住んでおられた竜安寺御陵之下町までは文字通り指呼の間である。田中氏の旧邸に隣接する地に勤務していること、「平安文学研究」誌の斯界への貢献の絶大なること、の二つは瞬時も念頭から離れることはなかつた。そこで野村氏らに諮つて書名を「平安文学研究」とし、その下に校地名を付し「平安文学研究・衣笠編」とすることとしたのであつた。



本書に収載されている論考及び資料は次のとおりである。括弧内は執筆者。

・ 柏木の「身」意識——源氏物語における「古代」と「近代」——（神田 洋）
・ 物語の「女院」再考——平安後期及び鎌倉物語に『源氏物語』藤壺の影響を見る

(野村倫子)

・光孝・宇多天皇の即位に関する一考察
——『大鏡』源融自薦譚を起点として——

(高橋照美)

・『松浦宮物語』の「血の涙」表現をめぐる作品構造考——渡唐の物語展開における「うつほ物語」取りの〈重なり〉——

(松浦あゆみ)

・『河海抄』の「和漢朗詠集」——主に朗詠注との関連から——

(吉岡貴子)

・高島天満宮拝殿天井画「百人一首歌仙絵」について

(長谷川正樹)

・「あえかに」か「ひはづに」か——源氏物語忍草・若菜上・下巻本文検討から——

(中西健治)

・読解力の理論的基礎——垣内松三初期国語教育学説の考察——

(安直哉)

(資料紹介)

・新資料『紫式部物語 附・和泉式部物語』紹介——解題・影印・翻刻——

(藤井佐美)

・十本対照「さころもの哥」本文と校異——
青山会文庫蔵「さころもの哥」の紹介——

(須藤圭)

(付) 青山会文庫蔵「さころもの哥」全文影印

○

本年一月に伴先生は古稀を迎えられ、本書の刊行の祝賀の意も併せて、遅ればせながら八月に高槻のホテルで会を開いた。伴先生ご夫妻もお出ましになり、元気な姿をお見せくださり、近況などをお話しくださった。月に一度、寝屋川市の古典学習会の講師として出講なさっているとのことや計画中の書物の話なども伺ったが、実は目下の関心は天文学にあつて、太陽系の惑星や月の裏側をどのような方法で見ることができるといったかという気宇壮大な話の方に時間を割かれた。その方面の知識などはまったく持ち合わせていない筆者は大いに面食らったものであつたが、先生の書齋に文学関係の書籍を退けて天文学関係のそれと並んでいる光景を想像すると何とも愉快である。

○

本書に収載されている多方面にわたる論考の評価はやがてなされることであらう。

資料二編のうち、藤井佐美氏執筆の「紫式部物語 附・和泉式部物語」は伴先生のご所蔵本である。藤井氏によれば今日までに類本が他に一本知られていることであるので、後日、詳細な報告がなされるはずである。また、須藤圭氏紹介の「さころもの哥」は筆者が蔵書整理にあたっていた青山会文庫の蔵書である。若干の付言を記すならば、寛文二年(一六六二)から延宝六年(一六七八)まで大坂城代であつた青山宗俊に関する古記録や種々の書籍が青山歴史村(青山会文庫)に保管されているうちの一写本である。類本は十本ほどあるが、今治市河野美術館や陽明文庫、宮内庁書陵部等に比べて遜色のない本であることがわかつた。それで本書の末尾に全文の影印を掲載してもらつた次第である。筆者は本書の内容紹介と宣伝を兼ねて和泉書院のPR誌「いずみ通信」(三十八号・二〇〇九・

一〇）に本書関連の記事を書いておいた。本書の書名のもとになっている「平安文学研究」はこの分野の研究者にとつては印象深く受け止められることであろう。加えて本書が本学の中古文学研究会の編集であることを知り、先に伴先生とその門下生の落窪物語研究会が編集して刊行された「長嘯室本落窪物語」（二〇〇五・三・和泉書院）のことに思いを致して、本学が平安文学を研究する一つの場としてあり続けていることを思うのではなからうか。可能ならば、本書の書名の下に「第二輯」、「第三輯」などと付けて刊行したいと考え、目下、その準備をしているところである。

（なかにし・けんじ 本学教授）

会員の 新著・新編著 紹介

- ・木村一信・竹松良明著『南方徴用作家叢書 ビルマ篇（南方軍政関係史料25）』（竜溪書舎 二〇一〇年二月）
 - ・坪内稔典著『正岡子規の〈楽しむ力〉』（日本放送出版協会 二〇〇九年十一月）
 - ・坪内稔典・杭迫柏樹著『季語のキブン』（二玄社 二〇〇九年十二月）
 - ・外村彰著『念ふ鳥 詩人高祖保』（龜鳴屋 二〇〇九年八月）
 - ・南丹市立文化博物館編『南丹市立文化博物館蔵小出文庫和書目録』（南丹市立文化博物館 二〇一〇年一月 *執筆編集協力 中西健治・鈴木耕太郎・須藤圭・岸本悠子・藤田さほ）
- 二〇一〇年二月までに刊行された会員の 新著・新編著を紹介いたします（前号までで紹介済みのものを除く）。他に書物を刊行された会員は本会まで一報ください。次号にて紹介いたします。なお、本会宛に一部ご寄贈戴けましたら幸甚です。

（編集部記）